海洋エネ 長崎の先進事例学ぶ

県産業化研究会WS 釜石沖のモデルプランも

県海洋エネルギー産業化研究会（会長・泉修一及川工務店社長、42会員）は15日、釜石市平田の釜石・大槌地域産業育成センターでワークショップ（WS）を開き、国内初の浮体式洋上風力発電実証事業を推進する長崎県五島市の取り組みを学んだ。釜石市沖は昨年4月、海洋再生可能エネルギーの実証フィールドに選ばれており、WSでは釜石沖で洋上風力発電を実現するためのモデルプランも示された。

会員企業や研究機関、行政の担当者ら約50人が参加。五島市再生可能エネルギー推進室長補佐の北川数幸さんが産業化に向けた取り組み、洋上風力発電の開発に携わった土木エンジニア佐藤郁さん（戸田建設）が実用化に向けた取り組みをそれぞれ紹介した。

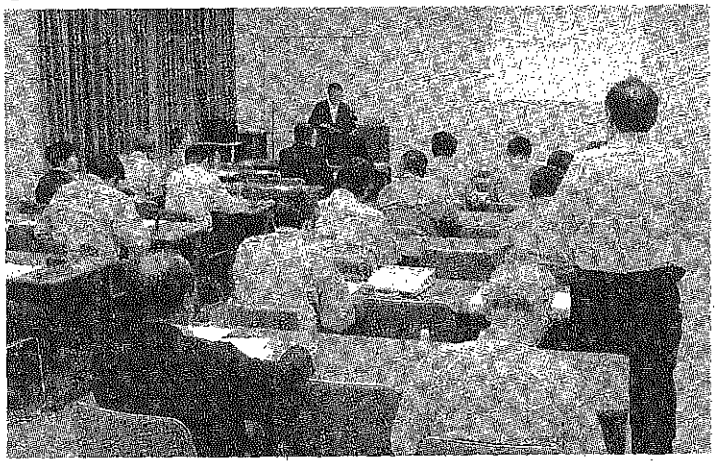
五島市の洋上風力発電の取り組みは2007年に始まり、13年に国内初の商用スケール浮体式発電実証機（2千キロワット）を設置。昨年、場所を移して運転を継続している。今年1月には、同市再生可能エネルギー産業育成研究会（16団体）が中心となり推進協議会を設立した。

懸念される漁業への影響については、地元漁協などと連携した調査で、風車が漁礁となり集魚効果があることも判明したという。

北川さんは「エネルギーをつくるのではなく、地域に仕事を生み出すのが目的」とした上で、「再生可能エネルギーのポテンシャルは地方に多い。五島市や釜石市がトップランナーとなり、全国に普及させたい」と意欲を語った。

佐藤さんは風車の運転状況、実証事業の成果や普及促進に向けた課題などを説明。釜石でも可能なモデルプランを示した上で、「事業リスクの低減、地域の理解と応援が不可欠。〝再エネバブル〟に終わらせないよう、大切な海をお借りするという姿勢で、元の海に戻せるようにすることが大切だ」と強調した。

同研究会は地元企業や研究機関などが研究開発の取り組みを地域経済に還流させようと昨年12月に設立。現在は地元企業が波の上下動を利用して発電するブイなどの開発を進めている。7月にも講演会を予定している。



長崎県五島市の先進事例を学んだワークショップ